様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18560619
研究課題名（和文）　介護施設の小規模処遇における人権を尊重した入浴環境の検討

研究課題名（英文）　The bathing environment that respected the human rights of small nursing facility

研究代表者
齋藤　芳徳（SAITO YOSHINORI）
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：40330641

研究成果の概要：特別養護老人ホームにおいて，集団介護と個別介護での入浴環境の実態を比較検討し，個別介護を支える入浴環境のソフト（個別介護）とハード（介護空間・介護浴槽）のあり方を探ること目的とした。得られた知見のキーワードは，少人数化・プライバシーの確保・介護負担の緩和・ユニバーサルデザイン・ユーザビリティ・事故防止であった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	540,000	3,640,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画
キーワード：介護施設，入浴環境，個別介護，小規模処遇，人権，介護浴槽，ユニバーサルデザイン

１．研究開始当初の背景

現在の日本が抱える課題の一つに要介護高齢者の増加がある。要介護高齢者の増加に対する施策として，高齢者保健福祉施策の一層の充実を図るため，2000 年(平成 12 年)にゴールドプラン 21 が策定され，介護サービス基盤の整備や生活支援対策などが掲げられた。そこには，高齢者の自立支援と尊厳の確保などの内容が盛り込まれており，量的な整備のみではなく質的向上を目指す傾向がみられる。

要介護高齢者の増加に伴い，要介護高齢者が在宅で暮らし続けることを断念せざるを得ない現状も多い。その理由に，家族が主介護者になることが困難であること，介護に適した家屋に改修できないことなどが挙げられている。在宅で暮らし続けることを断念せざるを得ない場合，生活の場が在宅から施設へ移ることになるが，生活環境の変化の一つに，施設職員による個人的領域への介入がある。そのため，利用者と介護者間でのプライバシーの確保や利用者の人権の尊重などは重要視されなければならない課題の一つとなるが，これまでの施設では，介護を効率面から捉えた集団介護が主流であった。しかし，個別介護などが推進され，施設においても介護の質が見直されつつあり，松原らや山口ら

は，自分らしい生活の実現を介護単位の小規模化の視点から捉えようとしている。しかし，介護を支える道具や空間などの物理的環境には課題が残されている。

例えば，三大介護には食事・排泄・入浴がある。介護単位の小規模化によって利用者各個人の能力や嗜好などの把握が可能となり，食事・排泄の介護では一定の成果を示している。一方，入浴介護は施設の入浴環境に依存する部分が強いため，これまで普通に入浴していた利用者でも，ADL が低下した場合は，機械力に頼った特殊入浴に一挙に移行してしまう例もみられる。また，介護効率のみを重視した集団介護（流れ作業）の入浴介護が行われているケースでは，不特定多数の介護者が関わる入浴環境が，利用者の羞恥心を傷つけている可能性は高い。さらに，認知症グループホームや小規模多機能居宅介護施設では，家庭用のユニットバスが設置されている施設も多く，認知症のユーザーインターフェイス面からの利点はみられるものの，利用者の介護度の重度化への対応や，小規模（＝少人数）であるが故のマンパワー不足の問題や安全面の問題などを抱えている。加えて，利用者の ADL の変化（独歩～車いす利用）に対応する入浴環境のユニバーサルデザインに関する研究も少ない。

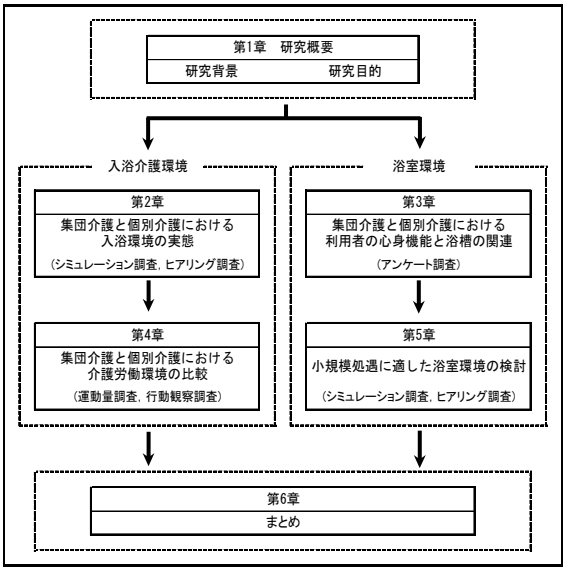
高齢者や障がい者の浴室環境関連の研究には，後藤らや橋本らの研究などがあるが，既往研究の対象は在宅の研究が多く，施設での個別入浴介護に関する研究の蓄積が望まれる。また，本研究の対象は，介護保険下の施設サービスである特別養護老人ホームであるが，認知症グループホーム・介護付有料老人ホーム・介護付高専賃などの居宅サービスや小規模多機能型居宅介護施設などの通所サービスの利用者の要介護度の重度化も視野に入れて，介護量が必要とされる入浴に関する利用者の自立支援，QOL の向上，安全性，介護負担の軽減などに寄与するための環境的な示唆を得るものである。

２．研究の目的

特別養護老人ホームにおいて，集団介護と個別介護での入浴環境の実態を比較検討し，個別介護を支える入浴環境のソフト（個別介護）とハード（介護空間・介護浴槽）のあり方を探ることを目的とする。

３．研究の方法

前述の背景を踏まえ，本研究は特別養護老人ホームにおいて，集団介護と個別介護での入浴環境の実態を比較検討し，個別介護を支



える入浴環境のソフト（個別介護）とハード（介護空間・介護浴槽）のあり方を探ることを目的とする。本研究のフレームを図に示す。

（1）集団介護と個別介護における入浴環境の実態を把握し，個別介護を支える入浴環境のあり方を探る。

（2）集団介護と個別介護における利用者の心身機能と浴槽の関連を比較し，個別介護を支える介護浴槽のあり方を探る。

（3）集団介護と個別介護における介護労働環境を比較し，介護内容や労働量に与える影響について探る。

（4）小規模処遇に適した浴室環境の構築へ向けて，個別介護を支える UD 浴槽の浴室空間寸法について検討する。

４．研究成果

本研究は，特別養護老人ホームにおいて，集団介護と個別介護での入浴環境の実態を比較検討し，個別介護を支える入浴環境のソフト（個別介護）とハード（介護空間・介護浴槽）のあり方を探ること目的とした。得られた知見は以下のとおりである。

（1）少人数化

・集団介護から個別介護へ移行することで，流れ作業的な入浴介護における役割分担がなくなり，利用者１人に関わる介護者数が減少した。
・個別介護により，１人の介護者が１人の利用者の入浴を支えることで，平均入浴時間が増え，会話も増えることにつながり，心身状況の変化を捉えやすくなっていた。

(2) プライバシーの確保
・1つの浴槽に1つの脱衣室という個別型浴室へのプラン変更により，浴室と脱衣室での複数の介護者と半裸の利用者の動線の交錯などが解消され，プライバシーの確保に繋がっていた。
・個別型浴室では，脱衣室で利用者が半裸の状態で順番を待つという時間もなくなり，体を冷やして体調を崩す心配も減っていた。

(3) 介護負担の緩和
・一般浴槽の場合，立位不可能な利用者の浴槽の出入りの際，1人または2人での無理な姿勢での介護による，転倒などの事故や介護者の身体的負担などが懸念された。また，無理な姿勢での浴槽の出入りは，利用者にとっても自然な入浴状況ではないため，危険時の回避反応も鈍くなりがちなことが予想された。
・個別型浴室では，日々変化する利用者と介護者の身体状況に応じて，一般浴槽の利用者が座位浴槽を利用するケースがみられ，利用者:介護者（1:1）の個別介護の場合，状況に応じて介護手段を選択できる必要性が示された。
・集団介護では，入浴誘導係の歩数が400歩/(10分)を超える値に突出していたが，個別介護では，業務変更に伴い，他の役割と同様の200歩/(10分)程度に減少し，介護負担の軽減傾向がみられた。
・個別介護により，入浴時間における一般的な日常介護が手厚くなるとともに，交代による休憩時間が増加した。

(4) ユニバーサルデザイン
・UD浴槽は,1台で独歩～車いす利用者まで，多様な利用者に対応していた。
・UD浴槽では，日々変化する利用者と介護者の身体状況に応じて，一般入浴と座位入浴を選択するケースがみられ，1台の浴槽で利用者の自立支援と介護負担の軽減に寄与していた。
・UD浴槽の浴室空間最小寸法は，2,200㎜×2,200㎜であり，介護浴室の省スペース化や省コスト化に繋がるとともに，複数の介護浴槽の設置が困難な小規模施設での援用の可能性が示された。

(5) ユーザビリティ
・これまでの生活で馴染みのない臥位入浴では，利用を拒否する利用者がみられた。また，臥位入浴では受身の入浴になりがちであった。
・認知症の利用者の場合，これまでの生活で馴染みのない入浴環境を拒否するケースがみられ，家庭的な環境に近い浴室環境と入浴支援が求められていた。木製浴槽の使用やUD浴槽のユニットバス化などは問題解決の一方策になると思われる。

(6) 事故防止
・介護浴室が広いためのヒートショック対策が，利用者の受身の入浴に繋がっており，介護浴室のコンパクト化の必要性が示されていた。
・日々変化する利用者や介護者の心身状況に対して，入浴介護手段を選択できることは事故防止に繋がると思われる。
・個別介護により，1人の介護者が1人の利用者の入浴を支えることは，流れ作業的な入浴での役割分担にありがちな「誰かが見ていてくれるだろう」という介護者の考えを排除することになり，事故防止に繋がると思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1件）

①松本正富，太田茂，齋藤芳徳，大戸寛，太田明彦：高齢者居住施設における浴室環境の違いが介護労働に与える影響，川崎医療福祉学会【査読有】，Vol.17 No.2，pp.415-421，2008

〔学会発表〕（計　5件）

①太田明彦，齋藤芳徳，山口健太郎，松本正富：個別介護に向けた介護浴槽の適応について－介護施設の小規模介護における人権を尊重した入浴環境の検討 その2，日本建築学会中国支部研究報告集，vol.31，2008，広島

②太田明彦，川本悠人，齋藤芳徳，山口健太郎，松本正富：特別養護老人ホームにおける身体機能別にみた入浴ケアの現状，日本福祉まちづくり学会，Vol.10，2007，埼玉

③松本正富，川本悠人，太田明彦，野上直紀，齋藤芳徳，山口健太郎：シャワーキャリーを利用した昇降式座位入浴介護における浴室空間に関する検討 －高齢者介護施設における小規模介護に向けた入浴環境に関する研究 その2，日本建築学会大会学術講演梗概集Ｅ-1，2007，福岡

④太田明彦，川本悠人，野上直紀，齋藤芳徳，山口健太郎，松本正富：特別養護老人ホームにおける入居者の心身状況と利用浴

槽の実態 －高齢者介護施設における小規模介護に向けた入浴環境に関する研究 その 1，日本建築学会大会学術講演梗概集Ｅ-1，2007，福岡

⑤川本悠人，太田明彦，齋藤芳徳，山口健太郎，松本正富：高齢者介護施設における入浴ケアの実態－介護施設の小規模介護における人権を尊重した入浴環境の検討 その 1，日本建築学会中国支部研究報告集，vol.30，pp.549-552，2007，鳥取

〔図書〕（計　1 件）

①齋藤芳徳：福祉住環境の機器・設備，「福祉空間学入門」，鹿島出版会，pp.127-140，2006

６．研究組織

(1)研究代表者
齋藤 芳徳（SAITO YOSHINORI）
茨城大学・教育学部・准教授
研究者番号：40330641

(2)研究分担者
松本 正富（MATUMOTO MASATOMI）
川崎医療福祉大学・医療福祉マネジメント学部・准教授
研究者番号：20341159

(3)連携研究者
太田　茂（OHTA SHIGERU）
川崎医療福祉大学・医療福祉マネジメント学部・教授
研究者番号：10233123

三浦　研（MIURA KEN）
大阪市立大学・生活科学研究科・
准教授
研究者番号：70311743